



料理大好き主婦の挑戦

松本 侑壬子・ジャーナリスト

考えてみれば、アメリカ映画には“世代を超えた女から女へ”がテーマの作品が結構多い。祖母や母親世代の女性が経てきた仕事や人生の経験を、孫・娘世代の若い女性が追体験してみてもすばらしさに感動し自分も受け継ぐ、という話である。『キルトにつづる愛』『フライド・グリーン・トマト』『ジョイ・ラック・クラブ』など、すぐに思い浮かぶ。

当節流行のファッション、ビジネス、セックスといったキーワードでくくられる、女の欲望の闘争劇タイプのスピードにちょっとくたびれ気味なときには、こうした女同士の絆を確かめるほのぼのとした作品が心地よいかも。

本作は主婦、料理、家族がキーワードだが、台所が女性を閉じ込める場所ではなく新たな社会に向けた再出発の情報発信基地となっているのがミソ。主婦は主婦でも、前向きなたくましい主婦の実話である。

監督は、今や恋愛コメディの女王とも言えるノーラ・エフロン。主演に大物女優メリル・ストリープと売れっ子エイミー・亚当スを得て、半世紀を隔てて料理がつなぐ女性の絆を描く。

1949年、パリ。夫の転勤でこの地にやってきたジュリア・チャイルド（ストリープ）は、40歳近くまでおカタイ政府機関の職員として働き、突然外交官夫人となった、好奇心とエネルギーの塊のような女性。フランスでは料理はおいしいばかりでなく芸術であると実感、早速名高い料理学校コルドンブルーのプロ養成コースに入学する。

最初は玉ネギ1つろくに刻めない腕前だったが、

185cmの長身にみなぎる向上心を包丁に集中、家庭でも懸命に奮闘し、優しい夫の励ましも得てめきめき腕を上げる。本人にそっくりと言われるストリープが、細かいことには構わずひたすら料理に打ち込むジュリアの姿を、楽しげに、時にユーモラスに演じている。

そして、料理本を執筆中という仲間と意気投合、自分もその出版プロジェクトに加わる。夫の転勤でヨーロッパを転々、その間も一人で料理本の執筆を続け、8年後、ついに524のレシピを載せた料理本を書き終えるが、世に出るまでには大騒動。テレビの人気者になったジュリアは、本番中にとんでもない失敗をするが、かまわずどんどん料理を進めて、はらはらどきどきの抱腹絶倒場面の連続。その実写の映像(?)を含めて、本人の愛すべき人柄が伝わってくる。「生きることを愛さなければ、おいしい料理は作れない」と言うとおり、ジュリアがフランス料理を基に書いたレシピは、愛情たっぷりのアメリカの家庭料理本として現在も愛読されている、という。

それから50年後のニューヨーク。30歳を目前にして、ジュリー・パウエル（アダムス）は冴えない自分を持って余っていた。友人らはみな「セックス・アンド・ザ・シティ」風に生活を楽しんでいるのに、自分はおんぼろアパートに住み、気乗りのしない公共機関の電話受付担当者。

何一つ楽しいことのない毎日。このままでは私の人生どうなる — 何か一つやり遂げたい、チャレンジしたい…。

ジュリーが思いついたのは、ジュリア・チャイルドの料理本に載っている524のレシピを1年間毎日作り、自分のブログに載せることだった。

小さな台所で、基本の基から始めた料理。成功と失敗の泣き笑いを繰り返すうちに、ジュリーは何かをつかんでいく。それは、半世紀前にジュリアが得たものと同じだろうか。ジュリーも考古学誌編集者の夫の「うまい!」の一言を励ましに、懸命に料理を作り続けるうちに…。

ハッピーエンドとは、恋愛の成就とは限らない。それにしても、料理は奥が深い。人生さえもおいしくしてしまうのだから。

『ジュリー&ジュリア』

アメリカ映画(123分)／ノーラ・エフロン監督

12月12日よりTOHOシネマズシャンテほか全国ロードショー

